開基130年・市制施行70周年記念

# いわみざわの民話をたどって

## 岩見沢の昔と今を振り返る

広報紙で、平成22年4月から今月号までの42回にわたって、25話のいわみざわの民話を紹介してきました。

今月号では、今までに紹介した民話の中から4話を題材に、当時の資料やいろいろな方のお話しを聞きながら、昔の岩見沢を振り返るとともに、発展した現在の様子を紹介します。

### 玉泉園物語

平成22年4月号掲載

【物語のあらすじ】

玉泉園のあるあたりには、昔キジやハト、鹿などがいて平和に暮らしていたが、アイヌが住みつき、狩りを行うようになった。狩りによって傷つく動物たちを神様が悲しみ、それらを癒やすための湧水を与えた。

ある日、傷ついた一匹の鹿がこの湧水のほとりで休み、数日で元気になったのを見たアイヌが、それがただの水ではないことを知り、アイヌもまたその恩恵を受けた。

やがて、ここを通る旅人の目にも止まり、沸かして温泉として使うようになり、いつしか、旅人のための仮の宿泊小屋もでき、年月が流れ玉泉園となった。

玉泉館の庭園（大正初期）

○　○

この物語に出てくる玉泉園は、明治37年から昭和54年まであった玉泉館という温泉旅館の庭園の事です。

長く市民の憩いの場として親しまれ、お花見をしたり、池にボートを浮かべ、

玉泉館でお花見（昭和28年頃）

紅葉を楽しんだりしていたようです。

また、園内にはエゾサンショウウオが生息していて、昭和29年5月5日発行の市の広報紙に、その保護を行った記事が掲載されています。

現在は、玉泉館跡地公園として、桜や紅葉など四季折々の姿を楽しめる、新たな市民の憩いの場となっています。

玉泉館跡地公園（現在）

# 渡し場物語

**平成22年6・7月号掲載**

**【物語のあらすじ】**

今の上志文町は昔、人の出入りが激しい宿場となっていて、岩見沢に行くにも夕張に行くにも必ず通らなければならない場所で、山間には万字炭鉱もあり、様々な人が集まっていた。

このまちで用心棒をしていた藤五郎は、駐在の巡査などでは手におえない、いざこざも簡単に治めることができた。

藤五郎は、家の近くの料理屋のオシズにひかれ、お互い熱い仲になった。

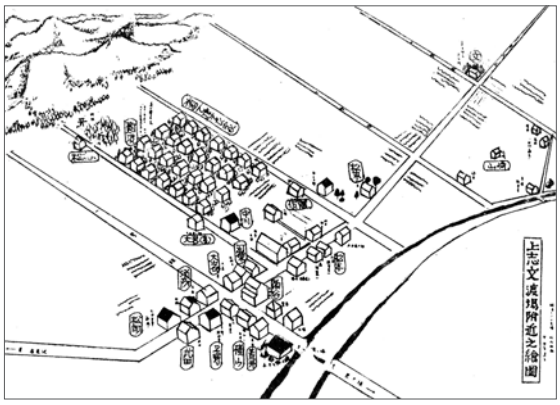
しかし、藤五郎には女房がいたので、オシズにお金を渡し、旅の連れもつけるなどして、こっそり夜の川を渡らせ夕張へ行かせた。上幌橋のたもとにある、ちょっとした大石にオシズは乗って、何度も藤五郎に無言のお辞儀をしていた。

❍　❍

明治22年に、北海道庁の技師一行が、現在の中央通りから上志文渡し場、継立を通って夕張の奥地へ行きました。この時通った馬道が岩見沢と夕張をつなぐ夕張通りとなり、多くの人々が行き来していたようです。

上志文のあたりは、明治22・23年頃から物語に出てくる渡し場付近から開拓が始まり、明治32年に万字道路が開通、道路沿いへの入植が増加し、明治40年頃にはかなりの土地が開拓されたようです。

夕張通り（大正初期）



上志文渡し場付近の絵図（明治37・38年頃）

出展 上志文のあゆみ 明治・大正編

その頃、一番賑わっていたのが、渡し場付近で、明治37・38年頃は最盛期で、旅館や料理屋、劇場をはじめ、北海道庁で建てた住宅もでき、約50戸の活気あるまちになっていました。

上幌橋（現在）

渡し場に架けられた上幌橋は、道道三笠栗山線の幌向川を渡る橋で、現在も車の往来が多く、交通の要衝となっています。

# イッチャン物語

**平成23年1・2月号掲載**

**【物語のあらすじ】**

市民に親しまれ、愛され、いまだに忘れられずにいる、イッチャンという乞食がいた。

イッチャンはよい家の生まれで、お嫁さんもいて、商売の独立もできたのに、いつしか放浪無頼の生活を始め、乞食にまで転落していった。

戦後もしばらくは姿を見せていて、物乞いをするでもなく、ただニコニコと家の前に立っていた。

ようやく物が豊かになりかけた頃、イッチャンの姿は市民の目の前から消えていた。

❍　❍

昭和20年の終戦直後、岩見沢は、敗戦による不安や混迷などによる暴動や略奪などのほか、天候不順による食糧難もあり混乱が続きました。

昭和25年には、市で、生活困窮浮浪者のための施設「望春寮」を南利根別に建設し、市独自の施設として注目されたようです。

このことから、岩見沢に限らず、戦後の日本には多くの浮浪者がいたことが伺えます。

物語に登場するイッチャンは、実在した人物で、当時は、ほとんどの

中央通り　１西１付近（昭和28年頃）

人が知っていて、乱暴なことはしない、話やすい人物で、イッチャンが商店のごみ置き場をあさっているときも、周りの人は何も言わずに見守っていたそうです。

当時は1条西1丁目から4丁目に商店などが立ち並び、大変賑わいがあったそうです。そこから2条にも商店や飲食店が増えていき、岩見沢の市街地が発展していきました。

３西２付近（昭和初期）

# お坊さんと『びわ橋』

平成24年10月号掲載

イッチャンの住んでいた小屋があった４条橋（現在）

**【物語のあらすじ】**

昔、一人のお坊さんが、今の幌向町のあたりからダルミ川を上流のほうへ歩いていった。このあたりは毎年水害があり、水害の無い村にしようと願いやって来たのでした。

少し川幅の広くなった場所に小さな小屋を作り、一心にお経を唱えた後、びわを弾き何かの物語をうたい、それが終わると、そのびわを川岸に埋め、その上に小さな赤ダモの木を植え、この地を去った。

何十年か経ち、この赤ダモの木は高く大きな道しるべの木になった。また、不思議なことに、大雨の時、流れてきた水が、びわのような形の沼になり、このあたりの水害がほとんど無くなった。

人々は、幌向と上幌向を往復するときに渡る橋にびわ橋と名付け、お坊さんへの恩を忘れないようにした。

大きな赤ダモの木は道路を広げるために切り倒され、橋もいつしか架け替えられたが、近くのお年寄りが秋の月夜にこの橋のたもとに行くと、お坊さんの弾いたびわの音が聞こえると言っていた。

❍　❍

物語に出てくる地域は、現在の中幌向のあたりのようです。

水害が頻繁にあったと言う話は、この地域に長く住んでいる人もあまり聞いたことが無いようで、開拓初期のことと思われます。

物語に出てくる赤ダモの木は、昭和30年頃まで、現在の国道12号線中幌向付近にあったようですが、昭和34年に道路が拡幅・舗装された際には、すでに切り倒されていたようです。

中幌向にあった赤ダモの木（昭和33年）
出展 開基80年 中幌向郷土誌

この道路は当時、幌向と岩見沢を結ぶ重要な道路で、人々の往来が盛んであったことから、拡幅によって交通の流れも良くなり、非常に便利になったようです。

現在は、4車線道路となり、北海道を代表する主要道路のひとつになっています。

国道12号線 赤ダモの木があったとされる付近（現在）

**ご協力いただいた皆さん**
池田敏雄さん、尾崎和男さん、金子昭夫さん、堀利幸さん

**参考資料**
郷土史いわみざわ、上志文のあゆみ明治・大正編、激動昭和の岩見沢、岩見沢市史、開基80年中幌向郷土誌